

## 〈研究ノート〉

# 心理検査の所見を書く —描画テストを中心に—

中京大学心理学部 馬場 史津

### In the process of writing a psychological test report

BABA Shizu (School of Psychology, Chukyo University)

#### Abstract

This paper reviewed the literature on psychological test reports. In the process of writing a psychological test report, the assessor formulates a hypothesis based on the physician's objectives, verifies it with a psychological test, summarizes the results, and communicates them in an understandable manner. It is important to explain the chief complaint from the test results and to relate it to clinical data and daily life. This paper addresses questions frequently asked by beginners, such as "To what extent can I include other information in the test report?" and "Can I write my own thoughts?". There is an aspect of graphic communication in drawing tests, and therefore there are difficulties in writing the report. Drawing test reports are based on understanding of the essential meaning of each indicator and then organizing the interpretation based on a kind of grammar of drawing tests. The task of assembling the signs of a drawing test is to use knowledge of the disease, pathology, and personality theory, disassemble the drawings for each index, reintegrate them, and search for a reasonable interpretation. Writing a psychological test report is to communicate the subject's personality in your own words.

キーワード : beginners, psychological test report, grammar of drawing tests

#### はじめに

大学院における公認心理師や臨床心理士受験資格の取得には「心理的アセスメントに関する理論と実践」「臨床心理査定演習」が必修科目となっている。心理アセスメントは面接や行動観察、心理検査などを用いて対象者の援助方針を立てる作業であり、なかでも心理検査は中心的な役割を担っている。上述の科目においても心理検査の実施、結果の整理、解釈、所見作成の教育が行われているが、心理検査の実施や解釈に比べ、所見やフィードバックについての訓練は十分とは言えず（依田，2015；加藤・吉村，2016），初学者からも心理検査の所見作成は難しいという意見が多い。そこで本稿では心理検査所見に関するこれまでの文献を紹介し，初学者の疑問に答えながら心理検査所見に何を書くのか，どのように書くのかといった観点から整理する。

また，心理検査の中でも描画テストは実施が簡便で様々な臨床場面で実施されているが，所見の作成が難しい検査の一つである。そこで本稿の後半では特に描画テストの所見を書くことについて取り上げることにする。

#### 心理検査所見に関する文献のレビュー

まずこれまでに発表されている心理検査所見の書き方に関する文献をレビューする。文献によって，所見，報告書，レポートなどの用語が用いられているが，本稿では文献の直接引用以外は「所見」として記述する。

Klopfer (1960/1967) による『臨床心理的レポート 心理学的資料の用い方とその伝え方』は，半世紀以上前の文献であり，現在ではあまり目にするのが少ないかもしれない。しかしながら，「依頼者は実際的な面で助けになるような情報を求めているのであり，臨床心理学者は，その情報を依頼者に与えるように準備すべきである (p. 7)」との記述は，現在にも通じる所見の基本である。また，「経験が乏しく十分に訓練されていない心理学者は，慎重な観察を不消化な塊のままにしておいたり，記号や指標を“料理の本”の一覧表のようにする傾向がある (p. 8)」と指摘し，所見で用いる専門的な概念を平易な言葉に翻訳した例を掲載している。

Huber (1961/2009) の『改訂 心理学と精神医学分野での報告書の書き方』は1981年の訳書からの改訂版である。所見作成の基本事項，様式，内容

について、またどのように表現すればよいかについての章では、読む人に「解釈を委ねる」べきではなく、「読む人が勝手に読みこむ」余地があつてはならないと戒め、曖昧な表現は所見として不適切であると述べている。本書の特徴は公刊されている所見の実際例に対し、考察として率直な意見が述べられている点であり、「この例によって何を明らかにしようとしているのかわからない……このような短い報告書において、例を挙げる必要があるか (p. 101)」といった厳しいコメントが掲載されている。実際の所見例にコメントするスタイルは多くの文献で見られるが、所見の書き方そのものへの率直なコメントは現代でも参考になることが多い。

菊池 (1990) は心理検査のスーパーヴァイザーの体験から、臨床経験の少ない検査者は「諸テストの結果を関連づけてまとめた上で被検者固有のパーソナリティ像を総合的に描きだすことができない……テスト間に生じた相反する結果をそのまま羅列してあったり、テスト毎に解釈が二転三転して結論が不明だったり、極端な例では、ひとつのテストの中でも、あるサインに含まれる多義的な解釈のすべてを教科書から引き写して無選択に列記してあったりする (p. 10)」と言及している。検査結果がまとめられない原因として、検査目的の曖昧さを指摘し、被検者の問題点や依頼者の依頼目的をそのまま心理検査の目的にするのではなく、検査者が作業仮説を立てる必要があると論じている。さらに「このような具体的な目的や仮説の設定は、解釈を限定したり歪めるのではないかと疑問視する人もいるが、それは方法の問題ではなく、そのテスター個人の防衛の問題ではないかと思う (p. 12)」と述べ、仮説を設定して心理検査を実施することの重要性が強調されている。

Lichtenberger, Mather, N, L. Kaufman & A, S. Kaufman (2004/2008) による『心理アセスメントレポートの書き方』は知能検査の所見に関する著作である。しかしながら、心理検査の所見全般に共通する内容が豊富で、所見の主な役割は被検者に関する仮説を立てること、被検者に関する疑問に答え、状態を説明することにあるとの主張は、これまでの文献と同様に所見の基本がここにあることを示している。また所見を書く技術として、文章の簡潔さや明確さ、連続性を保つためには接続詞を工夫するなど、非常に多くの具体例が示されていることが本書の特徴である。また行動観察に関する内容も多

く、行動をどのように解釈し所見に記述するのがわかりやすくまとめられている。

松澤 (2008) は、読み手を意識して書くことの重要性を述べながら、所見に含まれる内容として①対象者の氏名や性別といった基本情報②アセスメントの目的・理由③アセスメント実施の状況・様子④アセスメント結果・所見⑤所見 (まとめ) を挙げている。特に④アセスメント結果・所見では、数値などの生データを記述するだけでなく、そのデータから何が読み取れるのかを考察し、記すことが重要であると述べている。さらに所見作成の全般的留意点として、知能検査のようなはっきりと数値が出る検査では、その数値の性質が十分に理解されていないと誤解につながる可能性があること、人格検査では対象者の人格特徴を要素に分けて記述する作業にとどまり、全体像をイメージできるように記述されないまま所見が作成される危険性があると指摘している。

竹内 (2009) の『事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方』は、医療・福祉・司法・産業領域を網羅した心理検査の事例集である。各章の担当者によって所見の様式は異なるが、簡単な検査結果とともに所見が報告されている。心理検査がどのように発案されるのかに始まり、検査結果の活用とその検証まで、多くのパターンが紹介されている。所見を書くためには多くの所見に触れることが大切であり (加藤・吉村, 2016)、本書はその機会を提供してくれるといえよう。さらに本書では、それぞれの事例に対して、経験豊富な臨床家のコメントがついていることが特徴で、事例検討会の趣がある。第2集では、所見の最初に検査目的を書くことを推奨し、検査目的に即した所見、フィードバック面接を想定した所見という観点から編集されている (竹内, 2016)。

加藤・吉村 (2016) による『ロールシャッハテストの所見の書き方 —臨床の要請にこたえるために—』は2009年のロールシャッハ学会のワークショップ、2010年の教育講演をもとに構成されているが、2022年のロールシャッハ学会のワークショップにも取り上げられており、タイトルの通り臨床の要請が窺われる。ここではロールシャッハテストの所見例が詳しく記述され、また一事例に対する両著者の所見の比較検討は大変興味深い。さらに本書のディスカッション編では7名の臨床家がロールシャッハテストの所見をどのようにまとめるのかについて議

論している。「いい所見とは?」「どんな風に考えて書いているの?」「熟練までの過程・勉強の仕方」など、いくつもの見出しでまとめられており、誰もが抱く悩みについて助言がなされている。本書のエッセンスは「所見の書き方」(加藤, 2019)に改めて示され、吉村(2019)は「心理テスト報告書を活かす」として心理テストが有する心理療法への橋渡し機能について論じている。

さらに、伊藤(2017)も「心理アセスメントを行う際には目的があり、所見は目的に沿って作成される(p. 209)」と述べた上で、被検者に宛てた所見では「問題点を描写する場合には、被検者の側に立って表現するとよい……この被検者はどんな風に体験しているのだろうかと考えながら、元の資料から得られた解釈に基づいて言葉や表現を選ぶとよい(p. 217)」と記しており、被検者の日常と検査をつなぐ言葉の選び方など示唆に富む内容となっている。

姜(2018)は発達検査の所見の書き方をまとめている。どこまでのデータを開示すべきかに言及し、データをグラフ化して提示すること、実生活でのアドバイスを述べることを推奨している。

## 目的を明らかにする

これまでの文献をまとめると、所見とは「依頼者の目的に答える」ことを中核としているが、心理検査実施から所見を書くまでのプロセスを整理すると①依頼者の目的に合わせて②検査者が仮説を立て③心理検査を用いて実証し④結果をまとめ⑤わかりやすく伝えることである。伝える相手は依頼者であり、被験者にはフィードバックとして伝えられる。

概して多くの文献が検査目的の重要性を指摘している。依頼者の目的、つまり依頼者の疑問に答えることが所見の役割であるという観点からは当然のことだろう。依頼者の目的を受けて、検査者が仮説をたて、必要な心理検査が選択され、実施される。「所見に何を書くのか」と質問されることがあるが、どのような目的で検査を実施したのかに立ち戻るしかない。依頼者が心理検査を指定し、検査結果の数値の報告だけを求められる場合もあるかもしれない。しかし、なぜこの被検者にこの検査を実施するのかを考えてみることは大切なことであり、さらに言えば指定された検査が目的に沿ったものであるのか疑問が生じれば、依頼者と話し合い、改めて実施

する検査を提案することも検査者の役割と言えるだろう。

## 結果をまとめる

④結果をまとめる段階は解釈と連動する部分であり、検査に現れた特徴を“料理の本”の一覧表のように(Klopfer, 1960/1967)並べるのではなく、サインの解釈を無選択に列記するのでもなく、被検者固有のパーソナリティ像を総合的に描き出す(菊池, 1990)ことである。しかし、これは簡単なことではない。

ここでまとめることについて考えてみたい。「被検者にはAという特徴がみられ、さらにBも見受けられた」という記述は列記であり、そのことが何を意味しているかを考えることがまとめる作業である(松澤, 2008)。たとえば抑うつを強く訴える被検者について、その理由を知りたいとの目的で検査が実施されたとしよう。検査データでは、YG性格検査のD尺度の得点が高く、ロールシャッハテストでは特に抑うつ的な特徴は見られなかった。心的エネルギーは低下していないようだが、被検者の自己評価が抑うつ的であるという状態をどのように説明すればよいだろうか。仮に被検者は自分の苦境を訴えたのではないかと検査者が考えたのであれば、被検者がそのような状況にあるのか情報を確認してみるとよい。そういった情報が確認され、エネルギーがあるからこそ頻回に訴えることができるという理解があれば、「こういった状況にある被検者は抑うつ状態には陥っていないものの、自覚的な抑うつ感が強く、それが頻回な訴えとなっていると考えられる」とまとめることができる。

被検者の人物像をまとめるためには、個々の検査の特徴や検査それぞれの指標の特徴を理解する必要がある。質問紙法と投映法の水準の違いについての知識があれば、そこに生じた不一致を両者の特徴の違いから説明できることが多い。また、疾患や病態、パーソナリティ理論についての知識も必須である。マニュアルに書かれている解釈仮説は多くの研究成果をまとめて抽象化されたものである。それを個々の検査データの中に見出し、具体的な人物像として読み替えながらまとめる作業には経験を要する。日頃から「この指標が高ければ、日常生活にどのように表れてくるのだろうか」と考える練習をしてみるとよい。そして心理療法の経験を積み、被検

者の心の世界のありようが理解できるようになれば、検査においても人物像を描けるようになる。

まとめることに関しては、「他の情報をどこまで含めていいのか」という疑問もあるかもしれない。心理検査の解釈は心理検査に示された根拠から解釈することが原則である。心理検査の練習として面識のある人の検査を取ることがあるかもしれないが、検査者が抱いている日頃の印象を、あたかも心理検査から解釈したかのように記述してはいけない。これは川寄（2018）が外的情報を単に上手く描画にあてはめているだけの解釈と呼ぶものである。心理検査の目的は心理検査を用いて被検者の主訴や行動の意味を理解することであり、その他の情報も含めて一人の人物像として総合することである。「他の情報をどこまで含めていいのか」に対する一つの答えは、「その情報をどのように利用するのかを考え、正確に記述する」ということかもしれない。初学者の場合は「マニュアルに記載されていないことを書いてもよいのか」との疑問を抱くこともある。ここでも重要なことは、根拠が示せるか否かにある。根拠もなく、自分の考えを書くことは厳に慎むべきである。解釈をまとめる作業は、指標から言語への翻訳作業という側面が基盤にある（馬場・松田，2022）。そのことを常に意識しながら、その解釈から逆に指標に辿りつけるものでありたい。すらすらと言葉が浮かんでしまうときは、検査の特徴から離れて言葉だけが独り歩きしている場合があるので注意したほうがよいだろう。

まとめる作業において、さまざまな情報が一致した人物像は妥当性があると言える。しかし、情報が一致しない場合もあり、むしろそういった場合こそ、被検者の多面的理解につながるチャンスである。具体的に説明してみよう。たとえば、検査前の情報では、被検者は緊張しやすくコミュニケーションが難しいと聞いていたが、検査時には緊張感は少なく、スムーズにコミュニケーションができたでしょう。これは常に緊張しやすいのではなく、被検者の緊張感が場面によって異なることを意味している。そして、検査場面のどのような要因が緊張緩和につながっているのかを考え、被検者の日常生活に当てはめることができれば、被検者への具体的な提案やフィードバックにつながる。被検者の問題点を列挙するだけでなく、強みを記載することが推奨されるが、強みは必ずしも優れたところではなく、普通にできることはとても大切なことであるというこ

とを忘れてはならない。

## わかりやすく伝える

被検者の人物像をまとめることができれば、⑤わかりやすく伝えるは表現上の問題であり、意識することでかなり補われる。Lichtenberger et al. (2004/2008) の指摘は、所見だけでなくあらゆる文書において重要なことであろう。自分の癖には気が付きにくいいため、改めて日本語表現に関する書籍（原沢，2016）などで確認すると、思い込みを修正する機会になる。所見を作成した後で、音読することも薦めたい。第三者に所見を読んでもらい感想を聞くことが望ましいが、それも難しいかもしれない。内容はともかく、文章表現であれば、音読による確認は有効である。

検査結果の特徴からまとめた人物像は抽象的な表現になることが多い。たとえば、初学者のロールシャッハテスト所見には、「情緒的な統制が弱い」と書かれたものが散見される。これは間違いではないが抽象的でわかりにくい。そこで、主訴や現病歴、検査態度、より具体性のある心理検査（SCTなど）から得られた情報を使いながら「職場で上司からミスを指摘されると感情的になり不機嫌になるばかりで、自分の状況を説明できないため、周囲の理解を得られず孤立している可能性がある」と記述することで、読み手にもリアルな人物像が伝わる。具体的な言葉を入れることで読み手にイメージが広がり伝わりやすくなる（大辻，2019）。所見をフィードバック面接に利用する場合にも、被検者自身が日常生活に重ねやすい。

そして所見の記述は自分の考えを正確に伝える言葉を選びたい。竹内（2016）は所見に記載される言葉に対して「安易なマニュアル主義的態度が感じられることに危惧を覚える（p. 9）」と指摘しているが、検査者がさまざまな情報を統合して描いた人物像が、マニュアルの言葉やステレオタイプな表現に当てはめてしまった瞬間に、平板なありきたりの解釈、場合によっては検査者が描いていたものとは異なる人物像を伝えてしまっていることすらある。検査者には語彙力や表現力を高める訓練も必要だろう。

また「所見の適切な分量はどの程度か」と質問されることもあるが、分量というよりも、必要なことを必要なだけ書くことが大切である。心理検査から

得られた結果や解釈を全て書こうとするとかなりの分量になる。必要なことが絞り切れない場合は、まずは依頼者や被検者に役立つ情報のうち優先順位の高い内容を三つ程度選択し、重要な情報から書くことを薦めたい。それでもし所見の読み手から「短い」と指摘されれば、依頼者が期待していた内容が書かれていないということである。検査目的が共有できていたのか改めて検討する必要があるだろう。逆に「長い」と指摘されたなら、依頼者にはすでにわかっていたこと、役に立たないと思われる内容を書いていたのかもしれない。ここでもやはり依頼者の目的に立ち戻り考える必要がある。ポイントを端的に記述すれば、それほど長い所見にはならないだろう。所見を短くするために根拠を省略することも含め、読み手との関係性のなかで、臨機応変に対応すればよい。

これまでも多くの文献で述べられているように、所見をわかりやすく伝える工夫の前提は、読み手を意識することである。何がわかりやすいのかは読み手によって異なる。専門用語の使用も一概に否定すべきものではなく、専門家同士であればむしろ専門用語を使うほうが簡潔でわかりやすいこともある。読み手をいわばアセスメントしながら、相手の立場を想像した所見を目指したい。そしてその先の被検者へのフィードバックも考えなければならない。被検者の世界を想像しながら言葉を選び (伊藤, 2017), 問題点を指摘するだけでなく、実際的な提案が話し合えるような所見を工夫することが求められる。

## 描画テストの結果をまとめる

ここからは描画テストの所見について補足的に述べてみたい。描画テストも所見を書くプロセスは変わらない。しかしながら、描画テストには他の心理検査とは異なるグラフィックコミュニケーションの側面がある (高橋・高橋, 1986)。被検者の欲求や葛藤、感情が言葉ではなく絵によって伝達される特徴があるため、依頼者にまさに絵を見せることによって、言語的な所見よりも直接的に被検者の人物像を共有できることすらある。だからこそ、描画テストの所見を書くことはとても難しい。

たとえば、知能検査は問題ごとに正答・誤答があり、粗点を計算してIQが算出できる。プロフィールによる下位検査の比較や合成得点など既存の指標

のまとまりがあるため、人物像をまとめやすい。投射法の代表としてのロールシャッハテストでも、反応は記号化され、包括システムでは鍵となる変数によって解釈の手順が示されている (Exner, 2003/2009)。

一方、人格検査としての描画テストは全体的評価、形式分析、内容分析という大枠はあるものの、まず全体的評価では自分の印象を信じてよいのかどうかよくわからない。検査者も絵から何かを感じ取っているのだが、「そのような主観を解釈に利用してよいのか」という質問も多い。形式分析や内容分析では、絵をバラバラの要素に分けてそれぞれの解釈を並べることはできる。たとえば筆圧が高いから心理的緊張が高い、サイズが小さいので自尊心が低い、人物像に目鼻がないので自我同一性が確立されていないと並べてみる。しかしそれだけでは被検者の人物像を総合的に描きだしたことにはならない。むやみにまとめると、一つの身体にいくつもの動物が融合しているキメラのような所見が作成されることにもなりかねない (馬場・松田, 2022)。

私たちはいくつかの特徴をまとめて意味を見出そうとすると、単純に組み合わせているわけではない。たとえば、図1のように名古屋城と金平糖とショベルカーを見ても「名古屋城に金平糖が降り注ぎ、ショベルカーで埋めている」という文章は作らないだろう。文脈の意味が通らず、現実味がないからである。一方、「金平糖を食べながら名古屋城を観光していたら、ショベルカーで工事をしていた」という文章はあり得る。私たちはこれまでの経験から、金平糖が食べ物であり、ショベルカーが建設工事に使われる重機であると理解しているので、名古屋城、金平糖、ショベルカーという要素をある程度無理のないストーリーに組み立てることができるのである。

描画テストの指標をまとめる作業もこれと似ているところがある。それぞれの指標の本質的な意味を理解し、いわば描画テストの文法のようなものを念頭に整合性のある解釈を考えているといえよう。描画テストの文法について川崎 (2018) は、風景構成法は項目が順番に提示されるという本質的な構造を無視して読むことはできないと指摘している。風景構成法の項目が持つ象徴的意味により描き手に反応が生じ、次の項目の描写へと連鎖していく。この特徴が風景構成法の文法と呼ぶべきものであり、それに基づいて解釈がなされると述べている。

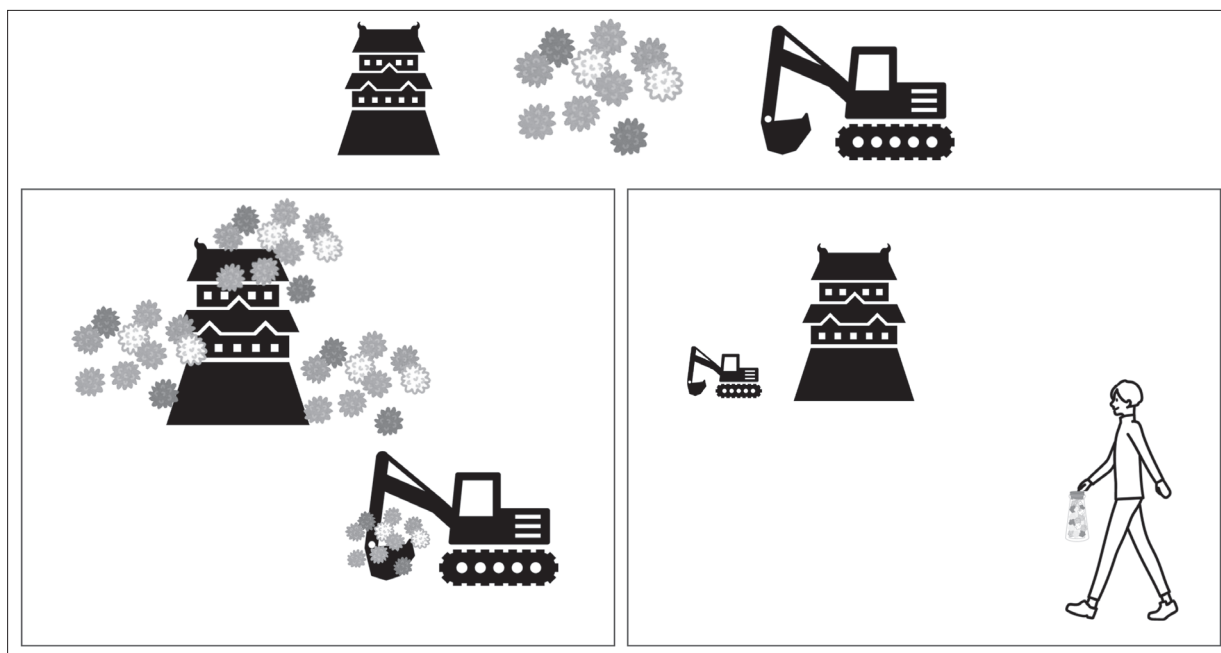


図1 特徴をまとめる

一般的な描画テストにおいても、形式分析や内容分析の指標の関連の仕方など、描画テストの文法のようなものがあるが、残念ながら明示されていない。その理由は描画テストの文法は非常に複雑かつ個別的で、事例として示すしかないからである。加藤・吉村（2016）はロールシャッハテストの解釈において「クラスターを解体して、自分のクラスターを作る（p. 155）」ことを推奨している。描画テストでもその被検者の絵ではどのようなクラスターができるのか、試行錯誤しながらまとめていくことが行われている。その際、基本的には心的エネルギーの表現である筆圧を前提に、そこに他の描画指標がどのように関連していくのかを見ることが多い。描画テストの特徴をまとめる作業とは、疾患や病態、パーソナリティ理論についての知識を援用しつつ、描画を指標ごとに解体し、再統合しながら妥当な解釈を模索していくことと言えよう。

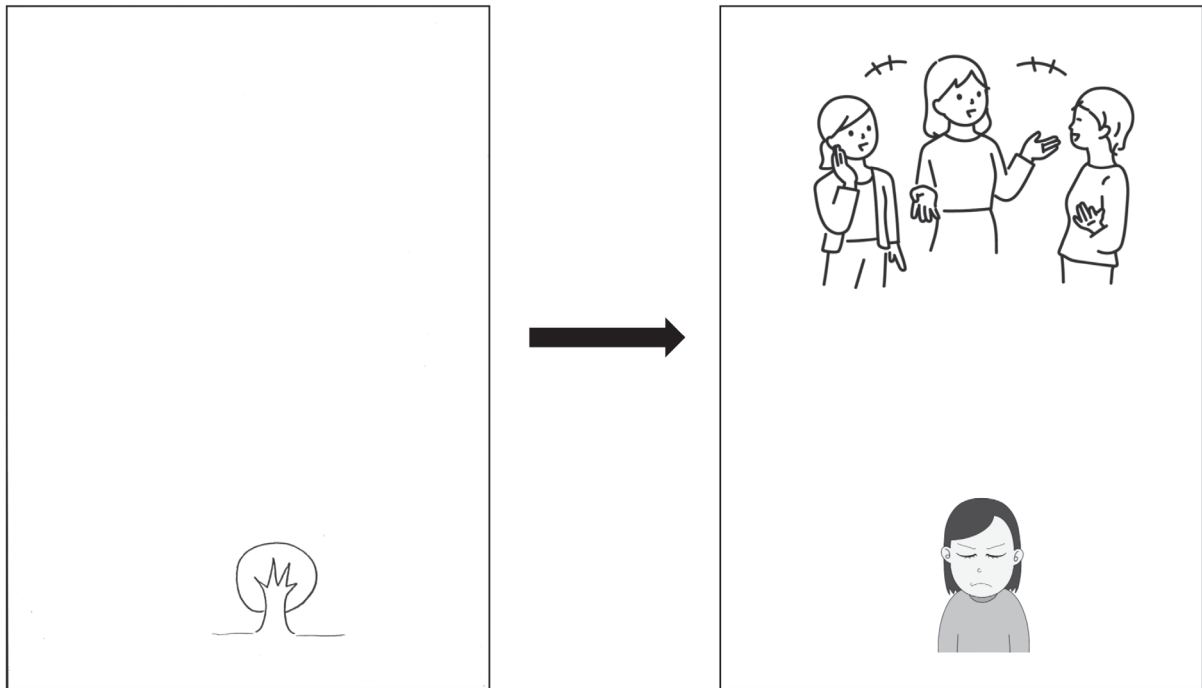
このような方法は客観性が担保されないのではないかと思うかもしれない。しかし要素をつなぐ文法は、これまでの研究成果や、パーソナリティ理論に基づいている。描画テストの文法が明記されていないために、検査者個人が恣意的にまとめているように思われやすいが、本来の描画の解釈はそのような主観的・恣意的なものではない。そしてその描きだされた人物像を検査者が追体験することで、整合性を確認することができるのではないだろうか。

### 描画テストの所見を書く

中村（2017）は描画解釈の流れに沿った所見のフォーマットを提示している。フォーマットは被検者情報から依頼目的、行動観察、解釈として全体的印象、形式分析、内容分析、各サインの解釈から総合的解釈、統合的解釈の段階で構成されている。

描画テストでも解釈の根拠を述べながら所見を書くことは変わらない。描画テストの解釈では指標の出現頻度を基準とすること多いため、筆者は「健全な成人は被検者のような非常に弱い筆圧で描くことは少なく、筆圧が意味する心的エネルギーの低下が窺える」のように書くことにしている。描画テストに馴染みのない依頼者は、テストの信頼性や妥当性に疑問を抱いているかもしれないので、根拠を丁寧に示すことも必要である。しかしながら、「筆圧が弱くて心的エネルギーが低い」というような並列的な所見にとどまらず、心的エネルギーの低さが被検者にどのような影響をもたらしているのかを記述する、つまりは描画テストの情報をいかにまとめられるのかがポイントになる。

統合的解釈では、描画テストの解釈に臨床像を重ね合わせ、日常生活や主訴との関連を説明する。心理検査は被検者の生活に役立ててこそ意味があり、今後の治療や心理療法を想定しながら記述することを心掛けたい。中村（2017）のフォーマットの内容を所見としてすべて提出するか否かは読み手によ



遠慮がちに小さく画用紙下方に描かれた力強い筆圧と鋭い枝先の木

攻撃的な気持ちを抱きながら、それを抑えて上手く関われずにいる状況

図2 描かれた木を本人の姿に重ねる

て異なるが、初学者にはフォーマットを用いた訓練が有効かもしれない。

一方で、熟練した検査者の所見は、それぞれの解釈に分けることなく全体的に書かれている。岸本(2009)は呈示された所見にコメントしながら、依頼者へのヒントになるような書き方を意識し添削した所見を記載している。岸本(2009)の解釈は「描かれた木そのものを描かれた様子も合わせてニュートラルに記述し、その上で、本人の姿と重ねて描かれた絵をどう理解するかということを考えていく(p. 93)」ことであり、所見にもそれが記述されている。描かれた木を本人の姿に重ねると一言でいっても、できるようで、できないと思うのではないだろうか。あえて説明を試みるならば、図2のようなイメージであろうか。たとえば、画用紙下方に遠慮がちに小さく描かれ、しかし力強い筆圧と鋭い枝先で描かれた木を被検者と重ねてみる。そこからは、内面に強いエネルギーがあり、ときに攻撃的な気持ちを抱きながら、周囲の人たちと上手く関われずにいると感じている被検者が見えてくるかもしれない。まさにその木が被検者であると考えて、そのままに受け取る。このような解釈ができるためには、事例などを通して「被検者はまさにあの木のように

だった」という体験を重ねることしかない。検査者が「被検者はこのような木の状態にあるかもしれない」と受け止め、伝えていくことが描画テストの所見である。

### おわりに

所見を添削しながら、筆者が「何が言いたかったのですか」と質問すると、検査者からは比較的わかりやすい説明が返ってくる。そこで、「まずそれをそのまま書いてみましょう」と指導し、ここから所見の書き方の教育が始まる。初学者は所見を書くことそのものに緊張し、せっかく理解した人物像があってもそれが伝えられずにいるように思える。所見を書く前に、思いつくまま誰かに話すかのように書いてみる、そのあとで何が優先されるのか、文章は正確か、読み手が意識されているかなどを考えながら推敲すればよい。所見を書くことは、被検者の人物像を自分の言葉で伝えることといっても過言ではない。大学院の演習では同じ被検者の所見を受講者全員が作成し、お互いに共有することになっている。書こうとしている人物像は概ね共通しているが、その表現の仕方には個性が表れる。お互いの所

見のよいところを吸収しながら切磋琢磨し、現場で役立つ所見を書いてほしい。

#### 引用文献

- 馬場史津・松田凌 (2022). 描画テストの解釈過程——解釈の基礎と所見 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 21 (1), 37-43
- Exner, J. E. (2003). *The Rorschach: A Comprehensive System. Volume 1. Basic Foundations and Principle of Interpretation. Fourth Edition.* Hoboken: John Wiley and Sons, Inc. (エクスナー, J. E. 中村紀子・野田昌道 (監訳) (2009). *ロールシャッハ・テスト——包括システムの基礎と解釈の原理* 金剛出版)
- 原沢伊都夫 (2016). *日本人のための日本語文法入門* 講談社
- Huber, J. T. (1961). *Report Writing in Psychology and Psychiatry.* New York: Harper and Brothers (ヒューバー, J. T. 上芝功博 (訳) (2009). *改訂 心理学と精神医学の分野での報告書の書き方* 悠書館)
- 伊藤幸江 (2017). *所見の書き方* 馬場禮子編著 力動的心理査定——ロールシャッハ法の継起分析を中心に 209-220 岩崎学術出版社
- 加藤志ほ子・吉村聡 (編著) (2016). *ロールシャッハテストの所見の書き方——臨床の要請にこたえるために* 岩崎学術出版社
- 加藤志ほ子 (2019). *所見の書き方* 臨床心理学, 19 (6), 698-702
- 川寄克哲 (2018). *風景構成法の文法と解釈——描画の読み方を学ぶ* 福村出版
- 菊池道子 (1990). 「心理テストのまとめ方」私論——テスト・バッテリーから報告書の作成まで 精神研心理臨床研究, 1, 10-21
- 岸本寛史 (2009). *文脈とプロセスへの配慮* 竹内健児 (編) *事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方* 86-

- 95 金剛出版
- Klopfer, W. G. (1960). *The psychological report: Use and communication of Psychological findings.* New York: Grune & Stratton, Inc. (クロッパ, W. G. 順天堂心理学グループ (訳) (1967) *臨床心理学的レポート——心理学的資料の用い方とその伝え方* 牧書店)
- 姜昌勲 (2018). *心理検査所見の書き方* 臨床心理学, 18 (6), 680-682 金剛出版
- Lichtenberger, E. O., Mather, N., Kaufman, N. L. & Kaufman, A. S. (2004). *Essentials of Assessment Report.* Hoboken; John Wiley and Sons, Inc. (リヒテンバーガー, E. O., マザー, N., カウフマン, N. L., カウフマン, A. S. 上野・染木 (監訳) (2008) *エッセンシャルズ 心理アセスメントレポートの書き方* 日本文化科学社)
- 松澤広和 (2008). *報告書の書き方* 下山晴彦・松澤広和編 *実践心理アセスメント* 25-28 日本評論社
- 中村延江 (2017). *バウムテスト・キット* 千葉テストセンター
- 大辻隆弘 (2019). *NHK 短歌* [https://tami0120.at.webry.info/201910/article\\_22.html](https://tami0120.at.webry.info/201910/article_22.html)
- 高橋雅春・高橋依子 (1986). *樹木画テスト* 文教書院
- 竹内健児 (2009). *心理検査の伝え方と活かし方* 竹内健児 (編) *事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方* 7-23 金剛出版
- 竹内健児 (2016). *心理検査の客観的で支持的なフィードバックを目指して* 竹内健児 (編) *心理検査を支援に繋ぐフィードバック——事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方* 第2集 3-18 金剛出版
- 依田尚也 (2015). *臨床心理士養成大学院における大学院生の心理検査訓練体験について* 人文, 14, 169-177
- 吉村聡 (2019). *心理テスト報告書を活かす* 臨床心理学, 19 (6), 703-707